ブラック　シンデレラ

智美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブラック　シンデレラ

【Ｎコード】
Ｎ６８６１Ｖ

【作者名】
智美

【あらすじ】
とあるＳＮＳサイトに初めて登録したまりこ。。。

なにがどうなっているのか？よくわからないまま

・・・感性の似たヒロと知り合う

出会い

『あしあとありがとう！あちこちあしあとつけまくって楽しいこと見つけてね！』
ヒロからのそんな伝言を見つけたまりこ

とあるＳＮＳサイトに入会登録したばかり
どうしたらいいのかもわからず、あちこちにあしあとをつけてしまっていたようだ
どうやってヒロのページへいったのかさえ覚えていない
自分のページに書き込まれた伝言を読んで、改めてヒロのページを訪ねてみる

プロフィールを読む
うんうん、歳は４つ下か！
なかなか楽しそうな人だわ。。。

『伝言ありがとうございました。まだなにもわからないのでよろしくお願いします』
『ボクは埼玉に２６年住んでいたんですよ！埼玉のどのあたりですか？』
『〇〇市です』
『あ～、そういえばあの〇〇有料道路って無料になったんだってね？なんか損した感じ！』
『そうですね、無料になりましたね』
『アグレッシブな方なんですね～』
『イヤ、なんにでも興味を持ってやってみたいだけなんだよね』
そんな他愛もないやりとりが伝言板でしばらく続いた

それからしばらくすると、マイフレ申請・・の文字をまりこはマイページに見つけた
マイフレって何だろう？

そっか、マイフレになると他の人に読まれずにメールが出来るんだ！
なんだか良さそうな人だし申請を受けてみようかな？
まりこは承認する・・の文字をクリックした

そうするうちにマイフレ専用のメールが届く
『承認ありがとう！待っている間、ドキドキしてしまいました』
『では簡単に自己紹介しますね！僕は都内で○○科の開業医をしています。家族は妻1人（当たり前か）子ども♂2人の父です』
え？え？お医者さんなの？？
・・・ビックリした

こんなところでお医者さんと知り合えるなんてラッキー！
そんな思いもありドキドキワクワクしながらメールをした
まりこは携帯からのアクセスだった為、いつ来るかわからない返事を何度も何度もサイトへ繋いで確認していた
も～めんどくさい！！
正直そう思ってイライラした

『サイト通してメールするのってメンドーですね？』
『じゃあ、携帯のアドレス教えましょうか？直でメールしますか？』
『いいの？』
『いいよ！アドレスは・・○○○○○○』
こうしてまりこはヒロとサイトを通さずメールをすることになった

そんな楽しいメールのやりとりが数日続いたある日

『少しだけ電話で話せないかな？声が聞きたい』
『・・・いいけど？』
『じゃ電話するね！』

『もしもし？・・ヒロです』
『思った通りの声だ！好きだよ、その声』
『なんで～？こんな変な声じゃない！』
ま、ほんのご挨拶・・雑談をして終わる

『会いたいって言ったら会ってくれる？』
『・・・いいけど？』
『ほんと？いつがいい？』
『いつでもいいけど、出来たら金曜日が嬉しいかな？次の日休みだから』
『わかった　じゃあ、来週の金曜日は空いてる？』
『うん、いいよ』
トントン拍子に会う約束が出来た

まりこはわくわくしてその日を待った
その日が来るのをヒロも楽しみにしていた
こんなに話が合う！感性が同じ！気が合う人もいるんだ！

・・・その週末
『ねぇ、金曜に約束したけど火曜日に会えない？』
ヒロからそんなメール
『どうして？』
『金曜まで待てないんだ！火曜に時間が取れそうだから会えるなら会いたいよ』
『え～？　私はやっぱり金曜がいいな～』

『・・・そっか、わかった　じゃ金曜まで我慢するよ』

そしていよいよ金曜日
待ち合わせはお互いの中間地点あたりの東京駅に決めた
金曜の7時・・東京駅の雑踏の中
顔も知らないふたりが会えるのだろうか？
『服装は・・たぶん麻のジャケットにジーンズ』
『写真送ろうか？』
『ううん、写真はいらない　きっとわかるから！携帯もあるしね？』
『眼鏡かけてる？』
『うん、かけてるけど！　嫌い？』
『ううん、眼鏡かけてる人・・好き』
『・・・そっか』

まりこは会う前に写メを見たくなかった
写真をあまり信じていないこともある
写り方ひとつで良くも悪くもなるから、ほんとの姿は実際会って自分の眼で確かめたかった
それに東京駅のスーツ姿が圧倒的に多い時間帯
麻のジャケットにジーンズなんてそうそういないハズ
すぐ見つけられると自信があったのだ

約束の7時
まりこは10分前に待ち合わせ場所に着いた
辺りを見渡すがそれらしき人はいない
人の邪魔にならない位置に立ち目を凝らす
あ！！！

きっと彼だ！！
遠くの方から歩いて来る
ヒロはまだまりこに気づかない様子
まりこの携帯に着信
『もしもし？　どこ？』
『ヒロ？　私、見つけたよ！』
そう言いながら手を振るとやっとヒロも気づき笑顔が見える

『初めまして』
『手を繋いでいいの？』
『勿論、約束だろ！！』
『行こうか？』
『うん』
『食べ物の好き嫌いはある？』
『ないよ』
『そっか！じゃ、ホルモンも平気？この東京駅に美味しい店がある
んだ』
『うん、じゃそこへ連れてって！』

ホルモン？？
まりこはグロテスクなイメージがあったが、なんのことはない・・
普通の焼き鳥屋さんみたいな感じ
ちょっとほっとした
お店が混んでいたので、テーブルは相席だったが仕方ない
隣に少し、気を遣いながらも二人の世界は確実に出来上がっていた

まりこは梅酒、ヒロは車だからウーロン茶を注文
あとで聞いた話・・ヒロは痛み止め薬の大量摂取で肝臓をやられて

いてお酒は禁止だということだった
ヒロは甲斐甲斐しく小皿に取り分けてくれたし、殻つきピーナッツは殻から豆を取り出してくれた
『優しいんだね？』
『好きな人だからさ、友達だったらこんなことしない』
『そうなの？好きなの？』
『当たり前だろ！』
にっこり笑うヒロ

まりこは幸せを感じていた
こんなに優しい人もいるんだ？
・・・会えてよかった
思い切って来てよかった

食事が終わると東京駅の外へ出た
ビル街のネオンが綺麗だ
ゆっくり歩きながらあのビルは〇〇で・・と教えてくれるヒロ

『連れて行きたいところがあるんだけど、少し歩ける？』
『どのくらい？』
『１０分くらいかな？』
『あのね、私ね、ウルトラマン子ちゃんなんだよね』
『・・・？？』
『３分しか歩けないってこと』
『あははは・・・そっか、わかった』

ヒロはいきなり歩き出すとタクシーを捉まえて
『さ、乗って！』

『帝国ホテルへ』
タクシーの中でもふたりはしっかり手を繋いだまま
『よく来るの？』
『学会で使うことがあるから』
初めて帝国ホテルに入ったまりこ
荘厳な雰囲気に圧倒されるがヒロは慣れたものでどんどん奥へ

エレベーターに乗り込みスカイラウンジバーへ
薄暗いバー　テーブルにはキャンドルの炎が僅かに揺れて
案内された窓際のカップルシートからは東京の夜景が・・・

あぁ、夢見ていたシチュエーション
まるでシンデレラみたいじゃない、私？
溶けてしまいそう

まりこは大好きな『テキーラサンライズ』
ヒロはオレンジジュース

『私ばっかりお酒飲んで悪いよ・・』
『いいの、ちゃんと南瓜の馬車で送って行くから安心して』
『ねぇ、学会で地方へ行く機会があったら一緒に行ける？』
『休みが取れたら行けるかもしれない』
『そっか、一緒に行きたいね』
まりこは嬉しかった
ヒロと旅行が出来るかもしれない？
そう思うだけで胸が高鳴った
たとえ、叶わぬ夢だとしても？そんな夢を持てることだけで嬉しかった

夜景とムードを堪能したふたりはバーを出、ふたりっきりのエレベ

ーターへ
ヒロは優しくまりこを抱き寄せキスをする
わぁぁぁ
まりこは恥ずかしさで・・私ったらなんてぎこちないキスしてるんだろ？と思っていた
・・・いくつになっても恥ずかしい

またタクシーに乗って東京駅へ戻って地下駐車場へ
ヒロが南瓜の馬車・・と称した車
『さぁ、どーぞ！　馬車へ』
そこに停まっていた馬車はベンツ
『え？　おベンツが南瓜の馬車なの@@？』

あぁ～、やっぱり今夜はシンデレラ！！
夢なら醒めないで！！！
まりこは心の中で叫んでいた
ツライ日常をヒロなら癒してくれるかもしれない・・そんな儚い夢を見た

醒めない夢なんてあるワケないのに・・・！！！

自宅近くまで南瓜の馬車で送ってもらい近所の駐車場へ車を停めたヘッドライトを消すと辺りは真っ暗闇
抱き合ってお別れのキス
『触って？』
ヒロが耳元で囁く
『どうすればいいの？』
ジーンズのファスナーを開けてトランクスを少し下げる

逞しく屹立したヒロのものが・・・・

『触って？』

・・・まりこはそれを優しく握った

二度目のデート

『ご馳走様でした　とっても楽しかったです！　気をつけて帰ってね』
『今日は楽しかったよ！　ありがとう　また時間作るから今度はゆっくりデートしような？』

3週間後の土曜日の約束までほぼ毎日のメール♪　まりこは生きがいが出来た・・気がしていた
過酷な毎日に少しだけ光が射した

そして・・・約束の日
『やっと会えるね！東京駅2時ね？　あと6時間ちょっと頑張ろうな！！』
『お昼ご飯は済ましてきてくれる？　オレは医院で仕出し食べていくから』
午前中、診療があるヒロはそうメールしてきた

待ち合わせはまた東京駅
最初の場所とは違う地下駐車場寄りにした
東京駅なんてとんとご縁のなかったまりこは迷っても遅刻しないように早め早めの時間設定で動いた
待たせるより自分が待つ方がいいと思っていたし！

季節は・・・秋、11月になっていた
彼の誕生日が数日後だ！

忙しい彼と次はいつ会えるかわからない・・・プレゼントを渡そう
散々考えて？　いつも持っていて欲しいもの、不自然じゃないもの？
黒皮製のストラップにヒロのイニシャルとさそり座のマークをオプションで装着したオリジナルキーホルダーを作ってもらった
プレゼントを持って約束の時間より早く到着

『ごめん、15分くらい遅れます　待っててね』
『いいよ、ゆっくりで・・・』

しばらく待つと・・早足で歩いてくる皮のロングコートを羽織って、
小さな丸いレンズのサングラスをかけたヒロの姿が遠くに見えた
一瞬、眼を疑うまりこ
（え？・・・ヒロだよね？？）
この前とあまりのギャップに戸惑う
初対面は人の良さそうな優しい感じ
今日は別人？　ヤクザ？ちょい悪おやじ？

紛れもなくヒロだと確信すると改めて　・・・惚れた
ヤバいっ！！！　ドキドキが止まらない
かっこいい！！！心から思った
恋する乙女？と化している今のまりこ、もう誰も止められない

『イヤぁ～～　ヒロ、かっこいいよ！』
『このコートじゃ、暑いな、まだ・・・』
少し照れたようにヒロはそう言った

いつも手を繋いでデートしたいよね！
そう約束していたふたりはさっそくしっかり手を繋ぎ、地下駐車場へと歩き出した

南瓜の馬車・・へ乗り込むとまりこは用意してきたプレゼントを差し出した

『・・・ん？』

『誕生日もうすぐでしょう？ちょっと早いけどプレゼント』

『え？・・いいの？　開けていい？』

『いいよ』

包装紙を大切に大切に開くヒロ

『おぉ！　ありがとう！！』

『どこかに使って？』

『わかった　大切にするよ』

そう言ってヒロはまりこを抱きしめて優しくキスをした

横浜〜？

『何処へ行こうか？　海ほたるも見せてあげたいしな〜　横浜もいいな〜？』
『どっちに行きたい？』
『私はヒロと一緒なら、どっちでもいいよ！』

地下駐車場を出発した南瓜の馬車の中で、ヒロとまりこは行き先で迷っていた
海の大好きなヒロはスキューバダイビングが趣味の一つで石垣島でマンタと泳ぐ事がなによりの幸せだと言う

首都高に乗った
『途中で海ほたる方面が混んでたらわかるから・・そしたら横浜にしよう！』
『うん、わかった』
大学時代、自動車部にいたというだけあってヒロの運転技術はなかなかのものだ
危なっかしくなく安心していられる
左手は、まりこと繋いだまま、右手だけでハンドル操作を楽々こなす
そんなヒロの横顔に見惚れながら
（なんて素敵なんだろう）
まりこは幸せいっぱい・・またシンデレラ気分になっていた

『あぁ、海ほたるの方は渋滞だって』
『じゃあ、横浜？』
『そうだね！　海ほたるは今度連れて行くから今日は横浜の海にしよう？』

『うん、わかった』

レインボーブリッジ⇒つばさ橋⇒ベイブリッジと渡って横浜へ
憧れの橋を次々と・・橋の由来を教えて貰いながら渡る
ヒロの博識に驚きつつ感心しつつ、秋にしてはきつめの日差しに眩しそうなヒロの横顔を惚れ惚れと見つめるまりこ
こんな素敵な人と巡り合えた幸せを感じていた

横浜へ着くと山下公園近くのパーキングへ車を停めて、手を繋いで公園を散歩する
潮の香りを感じながら
『やっぱり海はいいな～　ここも一時よりはだいぶ綺麗になったんだよ』
ヒロはまたいろんな事を教えてくれる

まりこは頭のいい人が好きだ
・・・自分の知らない事を話してくれるから
知識をひけらかすではなくて、さりげない会話からちらっと知性を感じられるのが好きだ

まさにヒロはそんな感じ
おバカな話をしていてもそのちらっ・・を何度も感じた

公園を一周して近所の散策をしながらパーキング近くへ戻ってくると
『あ！　こんなところにホテルが?！　ここに入って・・ホテルがそう言ってる』
いたずらっ子のように笑いながらそんなことを言う
『え?　うっそ～　ほんとに入るの?』
『うん、ここに入ろう?』

『・・・』
『イヤ？』
『う～ん・・・イヤじゃないけど』
『よっし！』
しっかり繋いだ手に一層力がこもって引っ張られるようにホテルへ

一歩、中へ入ると外の喧騒がまるでウソのような静けさだ
『海が見えるホテルだったらもっとよかったね？』
まりこが言うと
『そうだね、今度はそんなところへ行こう！』
いくら話しても話しても話し足りない
ふたりはしゃべりっぱなしだ
メールでは書ききれないお互いの想い
・・・時間がまだまだ足りない

『ねぇ？　ヒロは家庭がうまくいってないワケじゃないんでしょ？』
『まぁね・・・　いい夫、いい父親、いい先生？・・・だけど、オトコとしてのオレはそこには存在しない　オレはそんな寂しさを抱えて生きていきたくない　オトコとしてのオレでいたい』
『そうかもしれないね？　私はもう仮面夫婦をずっと続けていくしかないから・・・心の安らぎが欲しい』

ふたりとも【心】が乾いていた
自分の意思には関係なく日常に追われることに疲弊していた
お互いがその【心】の乾きを潤す何かを求めていたのかもしれない
心に空いた隙間を埋めたかったのかもしれない

・・・静かに穏やかに愛し合った

『こんな癒される時間が必要なんだ』
ポツリとそう言うとヒロは静かな寝息をたて始めた
まりこはヒロの寝顔を見つめていた
この人を支えてあげたい・・・

1時間ほどヒロは眠った
『寝ちゃった・・・何時になった？　腹減ったな？　ご飯食べに行こう！』

ホテルを出るところで
『ご馳走さまでしたぁ～』
『はぁ？　ちょっとヒロ！　ホテルに言うんじゃなくて、私にじゃないの？』
そう拗ねてみせると
『あ、そうだね！　ご馳走さまでした』
おどけてまりこに深々と頭を下げた
『まったくもぉ～』
まりこはゲラゲラ笑ってまたしっかり手を繋いだ

横浜〜？

パーキングから南瓜の馬車を出して中華街へ向かう
土曜日の中華街は人で溢れていた
その中をヒロのお薦めの店を探しながら歩く

『甘栗の試食を勧められるけど、貰っちゃダメだよ？　買わせられるからね！』
『わかった』
まりこ、ちょっとドキドキ！
早速試食の勧誘がいっぱい寄ってくる

もう少し行くと誰もお客の入っていないお店がある
この喧騒の中でひっそりと・・まるで開店していないかのようだ
お店を覗くと店員が椅子に腰掛け、ぼーっとしている

『この店、いっつもこうなんだよな　一度入ってみたい　不思議な店！』
『思いっきり美味しいか不味いか？　どっちかしかない感じじゃない？』
『だよな？』
『気になるわ〜』
『今度入ってみようか？』
『かなり勇気いるけどね？』
『だな！』
ヒロとまりこは勝手な事を言いながら笑った

中華街の外れの方にヒロのお薦めの店があった
『あった！ここ！　美味しいんだぜ』

『辛いものは平気？』
『辛さによるけど？』
『鶏肉と牛肉はどっちが好き？』
『どっちも』
メニューを一緒に覗きこみながら注文する品を決めていく
一品ずつ注文して全て半分ずつ食べる
相変わらずヒロは小皿に取り分けてくれた
まりこはそんなヒロを笑顔で見つめている

≪豆苗のニンニク炒め≫
まりこは初めて食べたこれが一番美味しくて気に入った

お腹いっぱいになったふたりはまたあの気になるお店を覗き込みながらパーキングまで戻る

次に連れて行ってくれたのは赤レンガ倉庫
まりこはテレビでしか観た事がない場所だ
ここがそうなんだ？！　感動！！
その後、ヒロが初日の出を一人で見に来る事が多いと言う場所にも行った

（一緒に見たいな～）
叶わぬ夢は重々承知・・・でも・・・まりこはそんな甘い夢を見た

ふたりでいる時間は短い

もっともっと時間が欲しい
明日も休日診療だと言うヒロ
・・・帰らないと！

『また来ような！』
『うん、また絶対来ようね！』

そんな当てのない約束を交わし・・・南瓜の馬車は
午前０時までかなりの時間を残してそれぞれの現実へと戻っていった

告白

次のデートは12月・・・まりこは
『綺麗に飾られたイルミネーションを一緒に見たい』
『手を繋いで歩きたい』とメールした
『わかった　ムードのあるところ行こうな』

約束の日の朝
『昨夜から熱が下がりません　午後から点滴して夕方には終わるからそれからでもいい？』
『・・・え？　熱があるなら無理しなくていいよ！　残念だけど今日は会うの止めよう　お大事に』
この日を楽しみに頑張ってきたふたりだったが病気には勝てない
ヒロは職業柄、どうしても患者さんからの病気がうつってしまう

初めてのキャンセル
『ごめんな・・・　この穴埋めは年内に必ず時間作るから』
『・・・うん　早く治るといいね』

暮れも押し詰まった29日やっと会う時間が取れた
イルミネーションは見れなかったが、ヒロは首都高を走ってレインボーブリッジの暮れからお正月まで数日だけしかライトアップしないというまさに≪レインボーカラー≫を見せてくれた
『綺麗・・・』
まりこは心からそう思った
（この景色、一生忘れない）

『帰宅！　楽しい時間をありがとう　好きだよ、まりこ　おやすみなさい』
そうメールが来たのは午前1時ちょっと前
後にも先にもこの日だけ・・・シンデレラタイムぎりぎりまでデート出来たのは！

新しい年が明けた
どんどん忙しくなってくるヒロ
会う時間を作るのもままならない
約束しても医師会からの緊急招集があったりで会える時間が減らされていく

朝の僅かな時間でのメール
まりこはひたすら待つだけになった
忙しいヒロを思うと自分からはメールしちゃいけない・・・と思っていた
『オレ、すっかり朝メール男になっちゃったな？』
ヒロはそう笑った

2月・・・約束の前日
『明日の待ち合わせ、4時に変更してくれる？　明日、検査に来いって連絡が来た！先月の健診で何か見つかったのかもしれない・・・』

『・・・わかった』
『明日、連絡するから・・・とりあえず待ってて』

『４時には行けそうだよ、お茶だけになるけどいいかな？』
『時間ないの？』
『時間は１０時くらいまで大丈夫なんだけど・・・検査結果でブルー入ってるから！　あぁ、踏んだり蹴ったりだよ』
『・・・』

南瓜の馬車の中
『実はオレ・・・去年、脳動脈瘤が見つかってね、オペしたんだ！
それは成功してなんとか復活したんだけど、今年の健診でまた違う動脈瘤が見つかった・・・　今回はオペ出来ない場所にある』
『・・・』
『大きさは？』
『８ミリ』
『・・・』
『いつ破裂するかわからないってこと？』
『うん、１０ミリなら即、開頭オペ、去年みたいにコイル塞栓術が出来ない場所なんだ』
『もし開頭オペしても麻痺が出る可能性もあるし、そうならもう医師としてはやっていけない・・・手先の細かい処置があるからね、言語麻痺の可能性もある』
『・・・』
『去年、動脈瘤が判った時、もうオレは終わりだと思っていろいろ

な事を整理した』
『で、オペをしてなんとか助かって・・・棺桶から起き上がって歩き出したら、また棺桶が眼の前にある・・・って感じかな？　わかる？』
『うん・・・』
『どうしてオレばっかり？って思うよ』
ポツリ吐き出すように言うヒロ

（こんなに見た目、健康体に見えるのに？どうして？どうして？どうして？）
まりこは涙がポロポロこぼれた
人を助ける仕事の彼がこんなに満身創痍だなんて・・・
言葉が出なかった
ここで上っ面の慰めの言葉を言っても何にもならない事もわかっていた

『とりあえず、普通の生活は大丈夫だって、しちゃいけないのはフルマラソンとセックス！』
薬で血圧のコントロールをして、毎日を過ごす

『おまえ、奥さんとはエッチしてるか？』
『ない・・・』
『彼女は？』
『・・・いる』
『そうか！　彼女に迷惑かけるから、可哀想だけど・・彼女ともエッチはダメだ！！』
『彼女とふたりの時、倒れたらどうする？』
『・・・』

仲のいい医師同士だから忌憚のないこんな会話だったらしい

『オレ、もう男止めようかな・・・』
『・・・』

『ヒロ？　もし、もしだよ？　ヒロが何処かで倒れたら？　私は何も知らずにひたすらメールを待つだけしかないんだよね？』
『それは・・・オレが倒れたら？　まりこに連絡が行くようにしてある』
『そのメールが来た時はもう・・・・・』
『・・・うん』

涙を拭っても拭っても次々に溢れてくる

『ヒロ？　ホテルへ連れていって？　イヤ？？？』
・・・意を決してまりこはそうつぶやいた

涙の・・・

まりこはふたりっきりになりたかった
ちゃんと向かい合ってヒロを抱きしめてあげたかった
いつ破裂するかわからない動脈瘤を抱えてそれでも必死で過酷な日々を過ごさなければならないヒロの気持ちを思うとやりきれなかったのだ

私の命を削って・・・ヒロにあげられるものなら・・・そうしたいと本気で思う
『家族以外にはまりこにしか話していない』
そう言ったヒロの気持ちも嬉しかった

『・・・ヒロ？』
『ん？』
『セックスはダメって・・・　そんなに負担が掛かるものなの？』
『そりゃそうだよ　１００メートル全力疾走くらいの負担だもんな』
『血圧一気に２００位に上がっちゃうよ』
『オナニーならいいワケ？』

『うん、一生オナニーだけで生きろってことだよ』

まだまだ男盛りのヒロにその宣告は想像以上に過酷であったに違いない

『ヒロ？』
『じゃあ、ヒロに負担を掛けないエッチしよ！』
『ヒロは寝てて・・・動かないで！！』
『・・・』

まりこはベッドに横たわったヒロの上になり静かに体を重ねた

『ヒロは動いちゃダメだよ？　ね？』
そっとそっとヒロの屹立したものを挿入した

『・・・うっっ・・・　まりこ、あたたかいよ』
『気持ちいい？』
『・・・うん』
『動いちゃダメだよ！』

・・・まりこは泣いていた
ヒロもタオルを顔に、眼のあたりにかけて泣いていた　・・・声を押し殺して！
ヒロの胸の上にまりこの涙がポタポタと落ちた

『ヒロ、絶対動いちゃダメだからね？』

・・・涙の・・・命がけのセックス

ヒロのオトコとしての尊厳、威厳を守ってあげたい
最後になるかもしれない・・・セックス

それはふたりだけの儀式だった

『ヒロ、私・・・何も出来ないけど、絶対ヒロを死なせない！死なせないから！！』

『・・・支えるからね』

『・・・死なないで』

日記

ふたりの絆は確実に深まった
まりこは・・・部屋の窓から見える朝焼けの後に眼が眩むような太陽が昇ってくる瞬間
手を合わせることが日課になった

『今日もヒロが無事に過ごせますように・・・』
『元気で生きていてくれますように・・・』
生きていてさえくれたら・・・生きていてさえくれたら
そう祈り続ける

ヒロは
『おはよう！　おれは元気だからね　今日もがんばろうな！』
『あんまり考えないで・・・好きだよ、まりこ』
そんなメールをくれた

会えなくても気持ちはひとつになったような気がしていた　お互いがお互いを思い遣ったメール

まりこはサイトに時おり書く日記をヒロがクスッとでも笑ってくれるように、元気になってくれるような日記を書こうと決めていた
泣き言を書けばヒロが悲しむ

ヒロへ向けて・・・日記を面白おかしく書いていこうと！
何もしてあげられないから・・・せめて笑ってくれますように！！
そんな物言わぬメッセージのつもり

一方・・・まりこの家庭
我慢出来ないくらい辛い出来事があって・・・ついそのやりきれなさを、愚痴を日記に書いてしまった
頑張って笑える日記を書く！と決めていたのに
ヒロに対して書いたワケじゃない、しかしヒロは自分への不満だと受け取ってしまう

『日記読んだよ・・・そんなに辛い思いさせてるなら、もう無理だよ！　オレはオレなりに頑張ってきたつもり！　それでも足りないって言うならもう無理だから・・・』
『まりこに辛い思いをさせるのがオレは一番辛い』

そんなメールがきた

まりこは慌てた
（そうじゃない・・・そうじゃないよ！　ヒロ！！！）

『ヒロへ向けて書いたんじゃないよ、わかって！！』
『家庭のことなんだよ！誤解させるような書き方してごめんなさい』
必死でそう返信したがヒロからの返事はこない

ヒロの診察時間には返事は無理だろう
（お昼休みにもしかしたら返事がくるかもしれない）
自分を無理矢理納得させて仕事をする
それでも・・・もしかしたら？と気になって何度も何度も携帯を置いてあるロッカーへ行ってしまう

ヒロを怒らせてしまった
・・・後悔の念だけ

愚痴っちゃいけなかったんだ！！
どんなに辛くても自分だけの心に留めておかなきゃいけなかったんだ
ジリジリした時間が過ぎていく

昼休み時間が終わってもメールはこない
もう許してもらえないんだ・・・
こんなことで怒らせてしまったんだ？

自分が撒いた種だけど、まさかヒロが自分の事と思うなんて・・・
私、何てことをしてしまったんだろう

悲しくて悲しくて仕方がない
あまりに待つことが辛くて、レイトショーで映画館へ行くことにした
まりこはなんとか時間をやり過ごそうとしていた
しかし映画を観ていてもバッグに入れた携帯が気になってしょうがない

（・・・もうダメだわ、ヒロは怒ってしまった）

映画館の暗闇だけがまりこの味方
ぼーっとスクリーンを眺めていても何も見えてなかったし、勿論ストーリーなど全然わかるはずもない

映画も終盤
まりこは待つことを諦めかかったその時

バッグの中で着信を知らせる光がピカッ！！
一瞬、眼を疑ったが確かに光っている
周りの人に気づかれないようにハンカチを被せて携帯の画面を見る

あ～ぁ、、、、ヒロからだ！！！

おそるおそるメールを読む

まりこの眼にジュワーーっと涙が浮かんできて画面の文字がぼやけて読めない

ハンカチで涙を拭く

拭いても拭いても涙が溢れてくる

早く涙・・・止まって!!!お願いだから・・・

『オレが悪かった　誤解してしまって・・・』

『まりこ、好きだよ　こんなオレでも好きでいてくれるか?』

『・・・好きでいて欲しい』

やっと読めたメール　何度も何度も読み返す

また涙が溢れて止まらなくなった

愛してる

『ねぇ、ヒロ？愛してる？　愛してるって言ってよ！』

まりこはそんなメールを送った

『その返事は今度会った時にね』

期待に胸踊らせて、次に会える日を待ったまりこ

ちゃんと顔を見てその言葉を言ってくれるの？

なんて素敵なんだろう？！

いつ、会えるんだろう

ワクワクドキドキ

会える日がやっとやってきた

『ヒロ？この前の質問覚えてる？　答えは？』

『・・・』

『ねぇ愛してる？』

ちょっとおどけて聞いてみた

『あのね、まりこ？ゴメン、　オレ【愛してる】はその人の為に死ねる！と思った人にしか言えないんだ』
『だからオレの中では、愛してる・・・は子どもたちにしか言えないんだ』
『・・・そうなんだ』
『奥さんには？』
『・・・言ったことはない』
『・・・』

（愛してるも言わないで結婚したんだ？この人は）
『好き』だけで？
そうなんだ、ふぅ～ん

『ゴメンな、まりこ、好きしか言えない』
まりこはもう何も言えなくなった

ヒロは昔から自分がこうと決めたら、人からなんと言われても強要されてもやらない、言わない、性分だと言う
そんなヒロなりの愛してる・・・の定義がある以上、テコでも動かないだろう

まりこは内心ガッカリして落ち込んだが表面はきわめて明るく振る舞った
・・・なんでもないかのように！
（やたら愛してるを言う人もイマイチ信用出来ないしね？）

『そうか、じゃ仕方ないね？』
『どれくらい好き？』
『こ～れくらい』
ヒロは両手を横に広げて見せる
『それっぽっちか？なぁ～んだ』

少しずつヒロを知っていく中で、まりこと知り合う数ヵ月ほど前から彼がサイトのコーナーに恋愛小説を投稿していることもわかった
家に帰ったまりこはどきどきしながら・・・教えて貰ったＨＮとタイトルから検索をしてヒロの小説を読んだ

・・・衝撃を受けた

元々は理系ではなく文系に進もうとしていたヒロ
そこには高３の夏に知り合った彼女とのいきさつから文系から理系への転向
医師を目指した経緯が記されていた
『こんな小説を書いていること、家族も知らないよ』

モテモテだった若い日
彼女との突然の別れ
３０年も前の話なのにまりこが嫉妬するに十分な内容だった

まして今はセックスも禁止されて、心で繋がっていると思っている
まりこだけれど
・・・ヒロの若い頃のいろいろな細かいセックス描写
次々と登場するオンナたち

『昔のことさ！』
いくらそう言われても理解しているつもりでも、どうしても嫉妬の
炎に身を焦がさざる小説だ

昔のオンナたちに嫉妬もないもんだが、ヒロの基本的なところがわ
かったような気がした
（あんまり変わってないよね？）

『嫉妬しちゃう』
そう言うまりこに

『少しの嫉妬はいいけど、あんまりヒドイ嫉妬はイヤだ！　嫉妬す
る自分もキライ！』

ヒロの答えだった

嫉妬

『サイトの付き合いはバーチャル！まりことはリアルだろ！』
『パソコンの画面だけの付き合いにいちいち焼き餅妬かないの！』
『オレだってまりこの伝言板のやりとり見ちゃったら焼き餅妬く自分がイヤだから、日記は読むけど伝言板は一切見ない！そう決めたんだ』

ヒロはある時期からそう言ってまりこのページを訪問してくれなくなった
日記をＵＰした時しか彼はページを訪問してくれない

ヒロのページを覗くと他の女性とのやりとりが見える

まりこはまた嫉妬する

どうして？どうして？
他の人とやりとりする暇があるなら、私とメールしてよ？！
せめて誰かとやりとりしたなら、私のページにあしあとくらいつけてよ！！
私は特別だから、ヒロを信じてどっかりとしてればいいの？
ヒロはそう言ったじゃない？

幾度となく襲うジレンマ

『どうして寂しい想いで待ち続けてる気持ちわかってくれないの？』
『もう少しかまって！女心をわかってよ！』
どうしても耐えられなくなってメールをする

『オレって、ほんとに鈍感男だよな！　ごめんな！』
悪気がないからどうしようもない

そのうちに段々ヒロが興味を持つ女性のタイプがわかってくる
頭が良くて文章力があり、ジョークの通じる女性
でも心に傷をもっていて・・・それでも明るく前向きに頑張る人！

まりこはヒロがやりとりする女性の中で、言葉だけなのか？また違った興味を持つ女性なのか？ピンとくるようになっていた

『自分からマイフレ申請はしないよ』
・・・それもウソだ
気づくと、まりこがピン！ときた女性と必ずマイフレになっている
イヤだ！！と思っている女性と

その女性がどうこうじゃない
ヒロのその興味の下心がとてつもなくイヤだった
スケベ根性丸出しじゃない？
私がいるのにその人と何がしたいわけ？

こんな気持ちが嫉妬なのだろう
まりこは好きな人には自分だけを見ていてほしかった
たとえバーチャルだろうがリアルだろうが！！！

（ほんとわかりやすいんだから・・・もぉ！）
まりこに悪い・・・という自覚がないから始末が悪い
『バーチャルじゃん！！』
あくまでそう言い張る

まりこが怯えて嫉妬した理由
バーチャルと言いながら、私たちはこうして実際会って付き合った
じゃない？
他の人ともそうならないとは限らない

まりこは自分にコンプレックスを持っている

自信がないのだ！！

小説に出てくる過去の女性・・・ヒロが好きになったタイプと自分は違うと感じていたから！

・・・容姿、行動、甘え方

とにかく自信が持てなかった

だからこそ好きならいつもいつも

『お前だけだよ！　好きだよ！』

言って欲しかったのかもしれない

・・・自信を持たせて欲しかったのだ

ヒロに新しいマイフレが増えていることを知ると胸がギューっと痛くなって、かぁ～っと頭に血が上る

しかし、それを言うと

『焼き餅妬くのもほどほどにしないとオレ、ほんとにイヤになるよ』

『好きなのはおまえだけなんだから、ドーンと構えてなさい！』

そんな返事しかこない

・・・寂しかった
でもまだ我慢していた

まりこが許せないと思った出来事

それは・・・あの初めて結ばれた横浜のふたりの記念日！！

１年後のその日

ヒロの小説のファンで小説をＵＰするといつもいつもコメントを書いてくる女性！

まりこはその女性の図々しさがキライだった
『あの人、なに！いつもいつもしつこくてイヤ！！』

『あの人はいつもパソコンに張り付いてるオタクみたいだし？コメ書いてくれるのも小説の宣伝になるし？放置しときましょ？害はないんだからさ！』

そんなふうに言っていたヒロ

ずっと待っていた『記念日だね！』のメールも寄越さずその女性と・・・その大切な記念日にマイフレになるべくやりとりをしていた事だ

・・・しかもヒロから申請してマイフレになった

裏切りだ！！　ヒドイ！！

『ヒロのバカ！！　しかもどうしてこの日なの？　鈍感！　無神経！！！！』

心の中で叫びながらまりこは泣いた

大切な日を冒涜された気分だったし、ヒロの鈍感さ、無神経さに腹が立った

私なんか私なんか・・・

彼女として付き合いだしたばっかりにサイトでの交流はほとんど出来なくなり、ヒロと他の女性のイチャイチャぶりを見せつけられるだけじゃない！

『ヒロって釣った魚にエサをあげないタイプでしょ？』

そんなイヤミも言ってみた

『そんなことないよ』

あ〜ぁ、、、、、、

誰だって自分の作品を褒められて期待されりゃ悪い気はしないだろう？

でもヒロ！！
あなたは鼻の下伸ばしすぎ！

私がこんなに嫌がってる女性とあてつけのように？

単純と言えば思いきり単純
判りやすすぎ！！

いくらバーチャルだとしても私に対する配慮が無さすぎでしょ？

まりこはこうしてどんどん嫉妬するオンナと化していった

KISS

嫉妬しながらもイライラしながらもまりこはヒロからの朝メールとたまに会える日だけを支えに毎日を生きていた

朝8時前後になるとヒロからのメール着信音≪あなたのとりこ≫が鳴らないかドキドキしながら待った

たかがメール！　されどメール！
メールが来た日は一気にテンションが上がる
逆に待っても待っても来ない日はガッカリして会社へ出かける
こんなことの繰り返し

どうして朝しかメール出来ないんだろ？

夜だって携帯が無理ならサイト通せばマイフレ専用のメールが出来るじゃない？
他の人とは、現にメールしてるんだから！！

・・・・納得できないよ

ヒロが私の方を向いてくれるのは日記をＵＰしたときだけ
だったら日記を書こう！
そしたらヒロが読んでくれる
気が向けばコメントをくれるかもしれない

そんなささやかな望みだけで日記を書いた
ツライことがあった日でも笑ってくれる日記を書き続けた

一方ヒロが書く小説は結構な人気があって読者もファンもどんどん増え続けている
執筆者としてのＨＮは別のものを使っていたから、ヒロがファンのページへ挨拶へ行かなければ直接のやりとりは見なくて済んだから、その点では少し安心していられた

まりこも書くことは嫌いではない
ヒロには読んで貰えなくても？書いてみようかな？
たまたま読んでくれる人がいたらいいじゃない？
私の日記には書けない・・苦しい本音を書こう
そんなことを真剣に考えるようになっていた

『埼玉にメンテに出してあるバイクを引き取りに行くから水曜に会えない？』
『その日は埼玉の家に泊まるから、いつもよりは時間もゆっくり出来ると思うし？』

新たな動脈瘤が見つかってから、ヒロの門限は一層早くなっていた
大の男が門限１０時？？？？？

『愛されているんだね、ヒロは？！』
『違うよ、その辺で倒れられちゃ困るから家族は心配するだけ』

それにしてもまた制約が増えた
百歩譲って・・・心配はわかるけど、５０のオトコが用事で外出するのに１０時？
それをしっかり守っているヒロもヒロ

（どーせ、私なんかヒロのスケジュールのちょっと空いた隙間に入れて貰っているだけ）

愛されてないしね？
まりこは自虐的になり笑ってしまう
恋愛においては・・・想いの強い方が負けじゃん？
勝ち負けじゃないけれど、やっぱり惚れたら全てに弱気になってしまう

（命、懸けて貰わなくていいからたまに会う日くらいせめてシンデレラタイムまで一緒にいられないの？）

いつもはヒロの帰る時間を計算すると遅くても９時にはバイバイし

なくてはならないのだ

その日は少しゆっくり出来るなら？
息子しか住んでいない家なら？
まりこはそんな期待で終電の時間をチェックしてその日を待った

雨の降る夜だった
電車でずっと手を繋ぎながら目的地まで向かった
居酒屋でいつものようにまりこにだけ梅酒を注文してくれてヒロはウーロン茶を飲む

若い頃のヒロは強くはないけれど、小説の中には必ずお酒が出てきていた
・・・今は薬漬けのヒロ

そこで初めてまりこも小説を書いていることを話した
『明日、帰ったらさっそく読むよ！　教えてくれてサンキューな！』
『早く読みたいな～！』

そしてトイレへ立ったヒロ
まりこの携帯にメールが・・・
『・・・ん？』
ヒロからだ？

そこにはヒロの小説の主人公・・・若かりし頃のヒロの写真が！！！
医学部に入学したての１９歳のヒロが写っていた

『へぇ～～～　これがヒロ？』
『うん』
『たしかに年上が放っておかないような顔だね！　でも今の顔の方が私は好き』
『・・・そっか？』

『さっ！そろそろ帰ろうか？』
『えっ？　まだ１０時半だよ、ヒロ～？』
『息子がデートなんだってさ！　１１時までに行かないと家に入れないんだ』
『なんでよ？　鍵、持ってないの？』
『・・・持ってない』

『なんでよーーー？　ゆっくり出来るって言ったじゃない？』
『ウソつき！！！』
『帰りたくないよ！　まだ一緒にいたいよ！！！』

ヒロの顔をまっすぐ見つめて、まりこの眼からはポロポロ涙がこぼれている
ヒロはほっぺの涙を拭いてくれた

『とりあえず出よう！　時間がないんだ　家に入れなくなっちゃう』
抱きかかえられるようにして店を出た

駅への道を相合傘で歩きながら
『ヒロのバカ！　うそつき！　ゆっくり出来るって言ったくせに！』
酔いの力もありまりこは悪態をついた

『・・・まだ帰りたくない』

あっという間に駅に着いてしまった
『ヤダヤダヤダぁ～～　帰らない！！！』
繋いだ手を引っ張ってまだダダをこねるまりこ
そんなまりこを困ったな？という顔で見ているヒロ

いきなり駅のコンコースの柱の影へまりこを連れて行き、がっちり抱きしめて熱烈なキスをした

永遠の別れかと思えるような熱い熱いキスだった

『ごめんな・・・また絶対会う時間作るから』

そして、逆方向への電車に乗り込んだヒロの姿をまりこは反対側ホームから手を振って見送った

まりこも電車に乗ってしばらくするとヒロからメール

『ありがとう、まりこ！　無事に家着いた』

『まりこの唇の余韻を忘れないうちにオナニーしちゃった！　大好きだよ、まりこ』

『今度こそゆっくり会おうね、ほんとにごめんな』

やっぱり何があってもヒロが好きだ！！！

・・・・まりこはそう思っていた

ずーーーーっとそばにいたい・・・　と！！！

ドタキャン

『読んだよ！　教えてくれてありがとな！　応援メッセージ書いといたから』
『まりこのこと、スゴクわかってよかったよ・・・正直で素直な書き方もいい！　次も期待してるからね』

・・・ヒロが褒めてくれた
素直に嬉しかった
彼に読んでもらえるならいっぱい書きたい・・・ほんとにそう思った
でも、力量の無さはまりこ自身が一番良くわかっている

フィクションは無理だ
創れない
だったらノンフィクションしかないな？
経験したことしか書けない

センスまるでないもんな！！
まりこはひとりで苦笑いしてしまった
書きたくなったら思ったことを書けばいいんだ

ヒロの医院は知り合った頃より人気が出て更に忙しくなっていた

午前中だけでも１００人以上の患者が来る

やっと時間を作って待ち合わせしても、その時間にヒロが現れるまで安心出来ないのだ
何度も何度もドタキャン

患者さんの病気がうつってしまったり、緊急医師会召集だったり
遅れてくるのは当たり前・・・それはいい　来てくれさえしたら！

一番酷かった待ち合わせ・・・東京に台風が一番接近している時間
もしかしたら、電車が止まってしまうかもしれない状況の日
それでも約束したのだ！！
朝のメールでは予定変更なしとの事

まりこは台風の中出かけた
幸い風は強いが電車にはまだ影響が出ていない

後はヒロが無事来てくれさえすれば？
約束の２時を過ぎた
そろそろかな？
ワクワクしながら待つ

・・・メール着信

『実は昨夜から熱が出てて検査したらインフルエンザだった　ゴメン、今日はキャンセルして』

（え？え～～？　私、もう待ち合わせ場所でまってるんだよ！　どうしてじゃあ朝、なんとなく言ってくれなかったの？）

東京駅の床に跪きそうになる衝撃だった
ガックリ膝が折れそうだった

インフルエンザじゃ仕方ないし、ヒロも朝は熱があっても解熱剤で下がると思っていたから会いにくるつもりでいたのだろう

仕方ないよ、仕方ないよね。。。

『わかった　お大事に・・・』
ショックのあまり絵文字もないそっけないメールを送信

イヤミを書かないだけよく我慢したと思うよ！まりこ！！
自分で自分を褒めて・・・台風の中、帰路についた

いったいなに、やってるんだろ？・・・私

東京への台風被害は大事に至らなかった・・・しかしヒロ台風は見事にまりこをピンポイントで直撃した

そのほかにもヒロが東京駅へ向かっている途中南瓜の馬車が壊れてしまったり
やっぱり魔法は魔法
・・・いつかはとけてしまうものなんだろうな？

『緊急事態だ～～　エアコン吹き出し口から煙がぁ～～～』
『車が止まって動かない』
友達にレッカー頼んだから少し遅れる！とか違う駅まで来れる？とか

『ねぇ、ヒロ？　私たちってすんなりは会えない運命なんだね？！』
まりこは苦笑いしながら言った
『ほんとにな？　どうしていつもこうなんだろな？』

もうアクシデントがあって当たり前！！
ちょっとやそっとじゃまりこ、驚かないよ！
ヒロのおかげで？　・・・・強くなったよ

私小説

私小説を書いたまりこ
ヒロはそれを読んでから一層まりこに傾倒したようだ

『まりこ、好きだから！』
そんな文字とハートマークが必ず入ったメールが頻繁にくるようになって、まりこは幸せを味わった
ヒロに好きだ！と言ってもらうことで、過酷な現実をなんとか生き抜こうと思う気持ちが強くなる

ヒロのことを支えてあげなければ！
見届けなければ！
死なせてたまるか！！！

ヒロは3ヶ月ごとに検査をしながらなんとか現状維持している
大きくなっていませんように！！！
検査の日の朝はふたりともただそれだけを祈った

『今、病院へ向かってる！　正直、ビビってます』
『ヒロ？　私も心はしっかりついて行くから！　ひとりじゃないからね、頑張って！』

そう励ますしか方法がなかった
ほんとについて行けるものならついて行きたかった
『ありがとな！　結果、わかったらメールするから待っててね』
『うん、きっと大丈夫だよ、ヒロ！！』

ヒロを励ます意味とまりこ自身をもっともっと知ってほしくて、まりこは新しい作品の執筆にとりかかった

暗い話じゃなくて明るくて笑える話？
ん～？
そうだ！　私の一生の楽しい思い出！
高校生の頃の話を書こう

まりこはとりつかれたように書き始めた

途中まで読んだヒロからメールがきた
『乗ってきたな～！　オレが嫉妬するってことはまりこが文章力、スゴイってことだよ　情景が目に浮かぶもん・・・悔しいけど』
『だけど、いい思い出なんだろうな？って思う』

『前の作品の時も思ったけど、素直な心の中がそのまま指先に出てきてるみたいな感じ　妙にカッコつけたり難しい言葉選んだりしてないでしょう　自然な気持ちの逆り・・・って感じだね』
『いいと思う、マジで♪』

『お～～っと、ライバル出現か～？』
『ロマンスの場面は、思いっきり嫉妬しまくりだけど・・・もう言わな～い！！』

『いっぱい嫉妬してよ？　嬉しいから』
『やだよ～　嫉妬しても絶対言わない』

そんなラブラブなメールのやりとりがまりこは何にも替えがたく嬉しかった

『ライバルだなんて、とてもとても・・・　一番弟子にしてくださ～い』
『あはっ、何が一番弟子だよ？　弟子取るほど、偉かね～～～っうの！』

『でもさ？　刺激になるよな？　お互いに』
『今日はオレも久々に更新出来たし、まりこの作品も読めたし、医師会のＦＡＸさえなければ最高の休日だったのにな』

この日、医師会からの緊急ＦＡＸで次のデートの約束が没になることがわかったのだ
１週間先になんとか時間が取れそうだったからまだ気分的には救われていたが・・・

『ヒロ？　会えない時間が愛、育ててる？』
まりこは大好きな郷ひろみの≪よろしく哀愁≫にかけて聞いてみる

『うん、今度カラオケで熱唱するからさ♪』
『大好きだよ、まりこ』

まりこはもっともっと頑張ってヒロが楽しんで読んでくれる作品を書こうと思った
ヒロが楽しみだ！！と、待ってくれるような作品を書こうと思った

・・・・・ヒロに褒めてもらえる事が最高に嬉しかったし幸せだった

丸ごと信じろ

『今度の土曜日、４時から６時・・２時間だけしか時間ないけど、お茶しない？』
『いいけど？』

『例の末期ガンの友達の集まりが夜あるんだよ　だから２時間だけなんだけど・・・』
『いいよ！』

もう４ヶ月も会えていなかった
２時間は不満だったけれど、会えるだけでいい
（しかもいつもなら２時待ち合わせなのに、どうして４時なの？）
心の中ではどうして？　そんな思いもあったがやっぱり会えるのは嬉しい
どんな形でも短い時間でも会って顔を見て話すことが大切だ！

『じゃあ、４時に品川駅ね？』
『え？　品川？』
（ヒロったら誰かと間違えてるのかしら？　いつも東京駅なのに・・・）

『ヒロ、品川なの？』

『うん、品川駅』
『品川駅、私わからないよ・・・何口とかわからないの？　出口ってひとつじゃないよね？』

『そっか、、じゃあ、やっぱり東京駅のいつものところに４時！』
『東京駅でいいの？　わかった』

よくワケがわからないまま４時に東京駅のいつもの場所で久々の再会

南瓜の馬車で向かった先は品川プリンスホテルの３９階
地上１４３メートルのスカイラウンジ
宇宙をテーマにした近未来風の内装・・・そこは宇宙船に乗ったような雰囲気が売りらしい

『前に友達の結婚式で来たことがあるんだ　　まりこにここからの景色を見せてあげたかった』
『それで、待ち合わせ品川って言ったの？』
『そう！』

そんなヒロの思いを知らなかったまりこは誰かと間違ってるんじゃ

ないの？と疑ってしまった

最初からそう言ってくれたらいいのに・・・

ちらっとそんな事を思いながらもヒロの気持ちが嬉しくてついつい

ニコニコなまりこ

窓際の席から見える景色

正面にスカイツリー！　その右手の遠くに東京タワー！

絶好のロケーションだ

『わぁぁ～～～　ヒロ、スゴイね～～』

ヒロはより眺めのいい席に・・・交代してまりこを座らせてくれた

『スカイツリーが完成したら一緒に上ろうな！』

『うん、絶対だよ？　約束だよ！』

もう少しで一般公開になる・・・そしたらヒロと一緒にあのスカイツリーに！！！

まりこは楽しみが増えた

時間を気にしながらとにかくいっぱい話す

メールでは話しきれないいろいろな事を！

やっぱりメールと実際会って話す・・・は違う

分かり合えるのだ、全てが！

まりこはヒロが文章に惹かれ、興味を持っていると感じた女性について思い切って聞いてみた

『また、○○さんにのめり込んでるでしょ？』
『見えないとこでどんなメールしてるの？』
『いや、原発についての情報持ってるんだよな、彼女！』

『ヒロはいつかきっとあのおばさんに会うね？！』
『・・・イヤ、そんな・・・』
『ヒロ？人間年齢じゃないけど・・・ヒロの憧れてる？彼女は６３歳のおばさんだよ、知ってるの？』

まりこは正直に言ってみた

『・・・そうなの？？・・・・』
ヒロに明らかに動揺の様子が浮かぶ

（どうして、この人は男女のどうのじゃないとは判るけど・・・私がいるのにあからさまに他の人に興味持つんだろ？）

それでいて嫉妬はするな！って？

（フツウ、好きな人が自分以外の女性に興味を示したら、オンナは嫉妬するでしょ？）

まりこは好きな人には・・・私だけを見つめていて欲しい！！！
余所見はして欲しくない
だからつい嫉妬してしまう

『安心出来ないんだもん、ヒロは！』
『私、今まではこんなに嫉妬するオンナじゃなかったんだよ』

まりこからそう言われると・・・ヒロは言った

『こうして会っている時のオレが全てだ！　バーチャルは別もの』
『丸ごと、オレを信じろ！！！』

なんだか妙に説得力があって？・・・まりこは今までのように嫉妬しないで
（丸ごと、ヒロを信じてみよう！！）

・・・そう思っていた

コーナー閉鎖

まりこの私小説・・・ヒロはもちろん、一部のファンに支えられ順調に進んでいた

そんな中、ある日突然・・・サイトのコーナー閉鎖が発表になった
1ヶ月後に一切の作品が消えてしまうというのだ！
道半ばで影も形もなくなってしまう・・・一方的な通告であった

え？え～～～～っ！！！
ヒロの大長編はまだ終わりも見えていない
まりこの作品もまだまだ書こうと思っていた矢先

無料サイトだからどんなシステム変更がなされても文句は言えない
でも・・・でも・・・

どうしよう？　どうしよう？

『ヒロ、コーナーなくなっちゃたらどうするの？』
『・・う～ん、どうしような？　こんないきなりの閉鎖は悔しいからどこかで書き続けると思うけど』

『そうだよね、ヒロの話まだまだ終わりそうじゃないもんね？』

『あはは・・・そうなんだよな！　夏休みだけの話なのに、もう６００ページ超えてるし～』

『ほんとにどうする？』

『もう少し、考える！』

『はっきり決まったら教えてよ？　私が一番のファンなんだからね！』

『うん、どこかに書くだけでもいいけど・・・やっぱり誰かに読んでもらいたいしな？』

『そうだね、それがヒロの望みだし、私もヒロの話がどうなるのか？　最後まで読みたい』

『そろそろ、いいかげん終わりにしようとは思ってるんだ！』

『そうなんだ？　終わりが見えてきたの？』

『・・・うん！！』

『ワクワクするな～　最後はどうなるんだろう？』

ヒロは忙しくてなかなか続きをＵＰすることが出来なくなっていた

それでも熱烈なファンは離れることもなく待っていてくれた

まりこはそんなヒロが秘かに自慢だった

（私がこの作者の彼女なのよ！　そう叫びたかった）

そこの・・・ヒロのファンだと言うあなた
いちいちむかつくのよ!!
陰でコソコソしないでよ!!

ヒロもヒロだよ!
放置しておきましょ!なんて調子いいこと言っておいて、彼女とマイフレになってて
そんなにその人、大事にしたい?

ヒロはあくまでも『あの人に関しては・・・嫉妬するに値しないから』と言い張る

まりこは・・・
(そうじゃないのよ、陰でコソコソされることがイヤなのよ! 後ろめたさがなければ堂々とみんなが読める伝言板でやりとりして欲しいのよ)と思っていた

そしてコーナー閉鎖が発表された後の彼女のコメント

『やめたやめた・・・もう書くのやめたーーーー』

ヒロがそのコメに対してどんな返事をしたのか？　容易に想像がつく
読む専門だと言っていた彼女が書いてみたい・・・と思っていたこ
とにもビックリしたし
実際、書き始めていたらしいことにも驚く

そこには・・・ヒロの影がちらつく

（どうしてその気になるような、調子いいことを書くんだろ？
そんなにみんなから【いい人】に思われたい？　チヤホヤされた
い？）

嫉妬とはちょっと違う感情

まりこは悲しかった
私っていったいヒロのなんなんだろう？

信じてついていきたい

でも・・・・でも・・・・

（どうして神経逆撫でするようなことばっかりするの？　ねぇ？
ヒロ？？？）

悩んで迷って・・・まりこはそのコーナーが閉鎖されるまでに自分の作品は完結させようと決めた
読んでくれているファンにもそう宣言した

頑張って完結までもっていく
そして・・・消滅させられる前に自らの手で終焉させる！！

ヒロがどうするかわからないけれど、後についていけばいい
違うサイトでヒロが執筆するならばそこへ行こう！！

新たな病が・・・

ヒロからは、休日以外ほとんど朝メールがくるようになっている
ハートマークのいっぱい入ったラブラブメール

『まりこ・・・好きだよ』
『今日も頑張ろうな！』

この朝メールは
元気を貰うことは勿論のこと、ヒロの無事を確認する！という大切な役割を果たしているのだ
いつ倒れないとも限らない

毎朝・・・８時前後

ヒロからのメールにだけ個別設定した着メロ　≪あなたのとりこ≫
この時間になるとまりこはこの着メロが鳴るのを待った
いつもいつも待っていた

最悪・・・メールが来ない日でもヒロがサイトへログインしてくるのがわかるとまりこはとりあえず安心していた
（メールは来なかったけど、ヒロは・・・今日も生きてる！！！元

気だ！！！大丈夫だ）

そんなある朝メールが来ない

不安が頭をよぎる　イヤな予感がする

サイトにもログインして来ない

（ヒロ？　なんかあったの？）

心配で心配で堪らない

（ヒロ？？？）

意を決してメールを送る

『おはよー　ヒロ、今日も好きだよ』

普通と変わらないように！　不安を悟られないように！

いつもならすぐに返事が来るのに・・・来ない

９時になればヒロは診療を始める　そうすれば返事は無理だ

・・・・来ない！！

心配なまま不安なまま時間が過ぎていく

午後1時前

『昨夜、夜中に胸が苦しくなって・・・』
『午前中医院を休診にして、朝一で病院へ行ってきた』

『検査したら、不整脈が悪化していて・・・』

『もうダイビングもゴルフも一切運動はダメだってさ・・・タバコも完全に止めろだって』
『なんでオレばっかり、次々にこんなに病気になるんだろな？　あ～～～～ぁ』

『今は薬を替えてもらって少し落ち着いた！　患者が待っているから午後の診療始めるよ』

来週、三宅島にダイビングに行くのを楽しみに頑張っていたヒロ
・・・もうその夢も絶たれた
どんなに残念だろう？　悔しいだろう？
ヒロの気持ちを思うとやりきれなかった

元々、軽い不整脈があったヒロは薬で抑えながら働いていた
脳動脈瘤の時はダイビングもゴルフも止められなかったのに、今回

は運動一切ダメって！

『バイクは？』
『バイクはいいってさ！』
ヒロの趣味で唯一残されたものはバイクだけ

どうして？　どうして？
この世に神様なんて・・・きっと・・・いない

サイト引越し

ヒロと会えた日、サイト閉鎖の話になった

ヒロはどこかのサイトで書き続けるつもり・・・と言う
『じゃあ、決まったら教えてよ！　絶対追いかけて行くから！　私がヒロの一番のファンなんだから～』
『うん、わかってる　はっきり決まったら教えるよ』
『早く続き読みたいな』
『今までのサイトではもう書くつもりはない　酷いよな？　いきなりすぎて』
『そうだね・・・　ヒロが他のサイトに行ったらまた遠くの人になっちゃうんだろな？　そんな気がする』
『なんで？　オレはオレじゃん　変わらないよ』
『そうかな～？』

まりこはなぜだか漠然と不安な気持ちに襲われていた
なぜだかわからないけれど寂しい気がしていた

ヒロのコメントが閉鎖されるコーナーに載ったのは数日後
サイトを引越ししたこと
このサイト運営の暴挙に対する想いがヒロにしては激しい語り口で

書き込まれていた

まりこは自分に一番に教えてくれるものと思っていたから面食らう
引越し先のサイトを探して登録してみると・・・もう既にまりこより先に追いかけてきたファンがマイフレになっている

（どうして？　どうして？どうして？）

他のみんなに発表する前に教えてくれなかったの？
私は特別じゃないの？

まりこは・・・ヒロのこういう鈍感さが堪らなかった
・・・ずっとずっと

ヒロに悪気はないのだが気づかないのだ
まりこにしてみれば・・・それならただの1ファンとかわらないじゃん？
常にそう思わざるをえない
ただのファンなら、まだマシだ！！　メールのやりとりだって自由に出来るしいつでもすきなことを書き込める

付き合いだしてから・・・そんなメールはほとんど出来なくなっていた
朝のメールだけ・・・朝メールが来ない日は他の人との楽しそうなやりとりを眺めるだけの夜

（なんで私とはメール出来ないの？　他の人とメールしたら私にもメールしてよ？）
ずっとずっとそう思い続ける毎日

いよいよ堪りかねてそう言うと
『わかったよ　ほんとオレって鈍感だよな？！』
笑いながらそう応えるヒロ
『ほんとだよ　どうしていっぱいオンナと付き合ってきてるのにわからないの？』
『けっこうオンナから振られたでしょ？　そんなんじゃ？』
『・・・うん』

『約束だよ　いつもじゃなくていいから私もかまって・・・』
『うん、ごめんな』

まりこは新しいサイトでまた衝撃を受ける
あの記念日の夜、マイフレになっていたあの人がマイフレ限定公開で私小説をＵＰしていた
マイフレ限定ということは、ヒロだけに読ませるためだけに書いたということだ

『ねぇ、ヒロ？　彼女はヒロだけに読ませるために書いたんだ？』
『イヤ、そうじゃなくて・・まだみんなに公開する自信がないんだって！　だからマイフレ限定で数時間だけ公開したんだよ』
『で、ヒロは読んだんでしょ？』
『一回だけね』

数時間公開ですって??
ヒロがいつログインするかわからないのに?
明らかに陰で二人でしめし合わせたことがわかる
・・・・また陰でこそこそと！
その人は完全にヒロの彼女気取りで、どうだ?と言わんばかり
まりこのページにもあしあとのみを残していく

はらわたが煮えくり返る・・・とはこんな感じなのだろうか?
それでもまりこは嫉妬することを嫌がるヒロを思ってひたすら我慢した

まりこのこんな悲しい想いも知らずヒロは陰で調子のいいことを言い、彼女を褒め続け・・自分のいい人っぷりをアピールしているのだろう

更なる衝撃は幾日もしないうちにやってきた

数時間限定公開のハズが調子にのってきたらしく第2部になっている

そこへのヒロのコメント

『ゴメン・・・シリアスな場面なのに勃起しちゃった』

はぁ〜〜〜〜〜???

内容の読めない本文に対して、みんなが読めるコメント欄にそんなことを書き込む無神経さ！

自分だけが読んでる優越感なワケ？

まりこが読むことは明らかなのに？

このオトコ・・・マジでサイテーだ！！！！！

書きたいことを書けばいい

ヒロは引越し先のサイトを公表して引っ越したため、熱烈なファンが作品の続きを読むために続々と新サイトへ追いかけて登録
日に日にファンの数が増えていく

まりこが登録したのを知るとヒロは

『来たね～～　待ってたよ！　まりこも書きたいこと、思ったことを自由に書きな～！　マイペースでさ』
『ちょっとこのサイトも使い方が面倒なところがあるけど、オレはここで書き続けるから』

『まりこの作品楽しみにしてるからね・・・』

そんなメールが来た

まりこは新しいサイトの使い方・・・戸惑ってしまってどうしていいのかわからない
でも、ヒロに読んでもらいたい・・・その一心で必死で使い方を覚えようとしていた

まりこなりのパソコンとの闘いが始まった
『ヒロはどうやって作品ＵＰしてるの？』

『オレはメモリースティックに全部入れてそこで加筆・訂正してからUPしてるよ！』
『いったんUPしちゃうと全部書き替わっちゃうんだよな、ここは・・・』
『そうだよね？　メンドーだよね？』

ん？？？
メモリースティック？
聞いたことはあるけど・・・ん？　ん？
使ったことないもん、わからんもん

どうしよう？
説明をよんでもイマイチ理解不能
自分の不甲斐なさに凹む

（あぁ～～～～やっぱりこのサイトは私には無理だわ！　使いこなせない）

まりこは落ち込んだ
ヒロと同じフィールドで書くことが出来ないんだ？！
自分の力の無さに自分で呆れる　悲しい！！
（パソコン誰か教えてよーーーーー）
・・・縋りつきたくなる

勿論頼れる人も教えてくれる人もいない・・・半分諦めムードで他のサイト探しをしてあちこち彷徨う

（ヒロの作品が読めたらそれでいいじゃない？　私は違うサイトで書けばいいんだ！）
無理矢理自分自身にそう納得させてみる
（でもやっぱりヒロと一緒のところで書きたい）
気持ちがあっちへいったりこっちへきたり揺れ動く

電気屋さんへ行き、メモリースティックなるものを買った
（よ～し！　第一段階出来たじゃない！　今までの自分の作品をそこに入れて・・と！）

（がんばれ、私！！！）

心で自分を励ましながら必死の模索が続く

なんとか編集できた
（やったぁ～～～　出来た！　ＵＰしてみよう！）

『まりこやったね！　書き出しやっぱ巧いね・・・読み手を惹きつけるよ！』

『お互い頑張ろうな』

・・・ヒロが褒めてくれた
嬉しい！！！

ヒロが私の書くものを読んでくれる、褒めてくれる
思ったことを自由になんでも書けばいいんだよ・・・そんな言葉に勇気を貰い、ずっと前に違うサイトで書いていたものを加筆・訂正して載せてみようか？

そんな気持ちになった
今までの私小説とは違う

オンナの心の奥に秘めた【魔性】の部分を！！！

意識するしないにかかわらずきっと誰もが持ち合わせる【オンナの魔性】

▼魔性▼　～作品

所詮オトナの
・・・エセ釈迦空間だもの

言っておくね
アタシは奥様じゃない

時々魔性が顔を出す
ナメてかからないでね

甘くないってこと
激しいアタシもいるの

うぬぼれないでね

ほったらかしのあなたに
うんざりなんだから

もっともっと本気で
とりこにしてみなよ

オトコは自分だけ
まさか思ってないよね

その程度で
アタシを繋いでおけるとでも

愛されてないのに
好きでいるなんて

プライドが許さないの

嫌いなオトコに嫉妬はしない

嫉妬されてるうちが華
早く気づいたほうがいいわ

嫉妬が消えたら
愛想つかしたってこと

何度も言わせないで

放っておける自信って何？
あなたの思い通りになると？

失って
気づいてもね

必死なオトコはメンドー
ウザいオトコもメンドー

これでも
結構一途

魔性が
眠っているときにはね

堕ちないオトコだから
魅力があるのよ

堕としてみたくなるのよね
魔性が眼を覚ます

軽いオトコなんて
・・・魅力なし

最後にオトコは
ひざまずく

一生離さない？
そんなこと戯言よね

でも
言わせたら
勝ちじゃない？

イライラするのよ

魔性の隙間に慈愛が顔を出す
いっそ魔性だけになれたらね
どちらもアタシ

信じちゃダメよ
溺れちゃダメよ
仮面だってば

心？身体？

笑わせないで
心だけならただの友達？

バイバイよ
せいせいしたわ

掌からこぼれ落ちたバカなオトコ

勘がいいのよ
騙すならしっかりね

ちやほやされて
うぬぼれて
・・・ガキ

かわいそうよね
もがいてもがいて
籠の鳥

がんじがらめ
何処へ翔びたい？

気持ちのないオトコ
・・・無理

それほどバカじゃない
何年オトコやってんの
なにを学んできたの
いいかげん気づきなよ

「世界で一番愛してる」
何人のオンナに言ってきた?

「あなただけよ」
これでご満足かしら
ヒィフティヒィフティ

別れの選択肢は
あなたじゃない

間違わないでね
わかってるわよ
エセ釈迦だって
それでもあなたがほしい
抱きしめて

たまに優しくなる
動物の嗅覚
ありえないわね
なにか感じるの
別れの匂い？
ありえないわね

寂しさがたまらないのよ
わかる？
あなただって
だからアタシを選んだはず

ゲームなのよね
本気のはずがない

ゲームなんだから
熱くなれば？

もっと大切にできない？
そのクールさが好きなのかも

いまにみていて
きっとアタシの虜になる

無理矢理
エセ釈迦になりきる

ほんとのアタシ
そんなに強くない
エセ釈迦のフリをする

オンナは
決めたら強い

オトコより
引きずらない
知ってる？
うぬぼれもほどほどに
そんなんじゃ
どんなオンナも
繋いでおけない

オンナはね
いつもいつも
言葉がほしい
「わかってるだろ？」
「わかんないよ！」

サイテー！！！
二人の記念日

サイテー！！！
無神経なあなた

自分のものにするまで
必死よね

自分のものになったら
何？それ？

鼻の下伸ばして
余所見してると

・・・消えちゃうよ

約束は
守ろうよ

せめてものルールじゃない

EXILEの♪Ti Amo

知ってる？

歌詞

知ってる？

頷きと涙

思いきって

まりこは作品をＵＰしてみた

ヒロが読んでどんな感想をくれるだろうか？

『書いたね！　いいじゃん？　こんな感じもありなんじゃないの？』

秘かにまりこはそんな返事を思っていた

以前・・・まりこが恋愛ものを書き、途中で頓挫していた時

『オシャレな恋愛小説、続き楽しみにしてるんだけどな？』

『あのね、やっぱ好きな人には読ませたくないじゃん？　いくら小説だとしてもベースは自分の過去だからさ！？』

『そりゃあ、嫉妬しちゃうけど・・・それはまりこの過去だし読んでみたいよ！』

『大切なまりこの生き様だろう！　続き遠慮しないで書いてよ』

『・・・でも～』

『読みたいよ』

そうメールしてきたヒロ

『まりこの思ったことを自由な感性で書きな?!』

まりこはそんな言葉を素直に信じていた
そして逡巡の末、【魔性】をＵＰしてみたのだ

感想を期待はしていたけれどいつ読んでくれるかもわからないし?
　サイトを覗くこともせず夜になっていた
夜中やっとサイトにログイン出来た

【新着メッセージが1件あります】

マイページにその知らせを見たまりこはドキドキした
（きっとヒロが読んで、メッセージをくれたんだ?　なんて書いてくれたんだろう?）

『　【魔性】読まなきゃよかったよ　・・・ごめんね、最低な鈍感男で』

え?え〜〜〜〜〜っ?　まりこは自分の眼を疑った
褒めてもらえるどころじゃない!
ヒロは【作品】としては読んでくれず、自分へのあてつけメッセー

ジと取ってしまった

え～～～～っ！！　そんなぁ～～～～！！
そんなつもりで書いたんじゃないよぉ・・・

『ヒロ、落ち着いてもう一度よく読んでみて！』
サイトメールで返信してみる
・・・返事は来ない

ヒロは時としてカッとする事がある
そうなると完全シカトになってしまう
いくらメールしようがテコでも動かないタイプ
それはいつもヒロが言っていたことだ

『納得しなければ、懇願されようが強制されようが・・・絶対オレは動かない！昔から一度も自分の意思以外で動いたことはない』

『誤解だよ！！ごめんね、私の書き方が悪かった・・・ヒロに対して書いたワケじゃない』
『イヤなら削除するから・・・』

思えば、以前にもメールで別れ話になった事が2度ほどあったっけ
会って顔を見て話せば笑い話で済むことがメールでは、書き手と読み手の取り方の違いで大事になってしまう

特にヒロは頑固さがハンパない
思いこんだらもうダメなのだ

返事をもらえないまま、何度も何度も『ごめんなさい』メールを送り続けた過去がある

例えば
『・・・寂しい』とメールする

機嫌のいい時は
『まりこだけが寂しいんじゃない！オレだって寂しい　頑張って時間作るからもうちょっと待っててね、好きだよ』

虫の居所が悪い時は
『そんなに寂しい思いさせてるなら、オレ、もうこれ以上は無理だわ・・・これでも頑張って時間作ってきたつもり！　それでも足りないって言うなら・・・』

自分が責められたと感じるとこんな返事が返ってくる

まりこはメールではだんだんホンネが書けなくなっていく
ヒロが怒らないように当たり障りのないメールしか出来なくなって

いた
無理して楽しい事、面白い事を書くようになっていた
『・・・もう無理だわ』
・・・この言葉が怖くて！！

やっとサイトのメッセージに返信あり
『そうなんだ・・・
でも、削除する必要なんて無いんじゃないの？・・・だって、本音なんでしょ？
でもね、オレが言われてた事がそのままだったからさ・・・。
こんな風に思ってたんだ・・・みたいな感じ。
少なくとも、笑って「何だ、そうだったんだ！」とは、思えませんね・・・。
ま、いいや、じゃ～ね＞（＿＿）＜ 』

・・・・・そう記されていた

それでも

まだその時点で、まりこは少し楽観していた
またいつものカッとしただけ・・・と思っていたから！

（しょうがないな、まったくヒロったら？）
どうして作品として読んでくれないんだろ？　思ったことを好きに書いたらいい・・・って言ってくれたじゃない？
謝れば・・・時間が経って落ち着いたら解ってくれる！！
そう思っていた

他の人が書いた似たような内容の文章には『う～ん、わかるよ！』みたいな寛容なコメをしていたヒロ

どうして私が【作品】として書いたものは冷静に読めないのだろ？
この程度の会話・・・女子会ならフツーに話してることだよ！
既婚男性を好きになった女性なら、一度は誰でももつ感情なんだよ？！

そんなに傷つくほどオンナに対して夢を持ってた？
いくつになっても、どんなに多くのオンナと付き合っても・・・ロマンチストなんだね？

一般的に・・・オトコはオンナよりロマンチストだと言われている
それは解るような気もするけど？

きっと作品として？作家としての？まりこの存在を認められなかった
自分が責められた・・・とその思いだけが先行してしまい、一瞬に
してまりこを【敵】と認知してしまったのだろう

こんな魔性の心を持った？オンナと付き合っている・・・ということがヒロの高いプライドを傷つけてしまったのだ

ヒロの書く私小説の中に次々と登場する女性たちは、自分を押し殺
しても？ヒロに彼女がいても？

『それでもいいから抱いて！！　２番目でも３番目でもいい・・・
少しだけヒロが好きでいてくれるならそれでいいの・・・』
ほとんどの女性がそんなセリフを吐き、ヒロのプライドをくすぐり
満足させるような女性ばかり
恋人がいるのにもかかわらずセックス三昧だった若い日
我慢強く言いなりになる女性たちに囲まれ・・・二股、三股が当た
り前に許されてきたヒロ

時が経ち既婚男性となってもヒロの中には【理想の女性神話】が存
在したままだった

それなのにこんなホンネを聞いてしまったのだ

自分の意のままに従う従順な女性だけが欲しかったのだろうヒロにはいくら【作品】だとしても・・・許せなかったのだろう

前日の朝メールでまりこの書いた違う作品に

『確かに妬いたけど・・・いいよ、展開♪　この調子でいきましょう！』

『慣れれば平気でしょ？　あっちもさ？　さ、今夜も頑張って更新しなきゃ～』

『好きだよ、まりこ』

『どれくらい好き？』

『はは、もうバカ！　うん、お前だけだよ、好きなのは・・・』

ハートマークいっぱいのラブラブメールのやりとりをしていたのにこの豹変ぶり

とにかく誤解を解かなくては！

まりこは、ヒロへのメッセージではないこと、強がった文章のところどころに書かれた【弱気な気持ち、無理して強がっている気持ち】を読んで欲しい！

そんな気持ちを書き綴ったメールを送り続けた
いくら待っても返事は来ない
２０数通送ったメールにやっと返事が来たのは１日半が過ぎた頃だった

『いい思い出もあるから、忘れないよ　今まで、迷惑ばっかりかけたかもしれないけど・・・楽しかった』
『結局オレは鈍感男のままだったんだな、ごめんなさい　元気でね』

取り付く島もない・・・とはこういうことなのだろう
もう何を言っても聞いてはくれないヒロだった

『ヒロに対してじゃないんだってば・・・わかって！！　そんなメール１本で捨てるワケ？』
『捨てるとかじゃなくて・・・本音（それが誰に対してであっても）聞いちゃったから、もう・・無理でしょ！　じゃ、ね』

まりこを捨てたヒロは、次の日にはもう次のターゲットを探してマイフレになり、数日後にはオフ会と称して会っていた

まりこが以前に
『きっとこの人とヒロは会うね？』
直感で感じてそう聞いた人とも既に会う約束

『絶対、会わないよ！』

・・・ウソばっかり

まりこはあまりに一方的な別れの宣告にどうしようもやりきれない悲しさ悔しさを覚えた
いつか・・・別れは仕方ないことだと解っていたが、こんな形の別れがくるとは？！

しかもさっそく他のオンナ探しに動いたヒロに堪りかねてメールを送った

『やっぱりヒドイひとだね！　私をボロ布のように捨てたら、さっそく違うオンナ探しですか？！』
『ちゃんとした大人ならそれなりの別れ方があるんじゃないの？』

『どう取られてもいいよ
・・・覆水盆に返らず・・って事だから！では、元気でね』

返って来たこのメールにまりこは・・・ヒロの傲慢な本性と本音を見た

あの日から

ラブラブの絶頂から地獄のどん底に落ちてもサイト上にはなんの変化もない
ヒロはマイフレを解除するでもなくそのまま放置

自分からアクションを起こすことを拒んでいた
放置しておけばいい！
きっとその程度の認識なのだ

まりこが痺れを切らしてアクションを起こすのを待っていたハズ
自分が先に動けば言い訳が立たないから！

（・・・どこまで汚いやり方なの！）

【魔性】を作品としてＵＰしたあの日から１ヶ月になろうとしていた
まりこは日記を書くことが怖かった

ヒロは絶対読みに来ないと思ったが、（もし万が一、読んだらどうしよう？）
これまでヒロに読んでもらって元気になってほしくて書いていた日記
そのヒロに捨てられた今・・・もはや【日記を書く】と言う意味を無くしていた

恐る恐る当たり障りのないことを書いてみた
ところが、まさか・・・まさかのヒロがなんの躊躇いもなく日記を読みに来た

・・・・どうして??

どうして読みに来れるの?
まりこはヒロの神経を疑った　無神経さに呆れた

ヒロがどんな事を思い日記を読みに来たのか、本当のところはわからない
まりこが何を書いたか?　きっとそんな程度だろう?

表面上・・・あくまでも【いい人】で居続けたいヒロの姑息さ
器の小ささが丸見えだとハッキリ認識出来た瞬間

まりこはこんな人を2年近く心配し一喜一憂し祈り続けたのか!と思うと惨めな思いでいっぱいになった

ただの【都合のいいオンナ】だったんだよ
本気になっていたのは自分ひとりだったんだよ

・・・自分に言い聞かせ続ける

（本当にバカよね、私って・・・）
まりこは自嘲した

このままではいつまでも前に進めない
まりこはこの期に及んでも、僅かな未練を残しつつマイフレを解除した

その夜
待っていたように・・・ヒロは引越ししたサイトでまりこをマイフレから削除していた

バーチャル

ネットのバーチャル世界からリアル世界へ飛び出して出会ってしまったことが間違いだったのかもしれない
まりこはそう思っていた

ネットの世界だけだったらこんなに辛く悲しい思いもせず生きていけたのかも？
どんな人間にもなれるしどんなウソもまかり通る世界

・・・人間不信
そんな言葉が頭の中でぐるぐる廻り続ける

相変わらず、ヒロのターゲット探しは続いている
続いているどころか必死だ
オフ会へ参加しては・・いい人アピールしまくりで人気者になり、
医者であることを自ら話す
小説サイトでは、バーチャルとは言えウソのコメントを書き共感を得る書き込みが・・・

（そんなにしてまで、いい人と思われたい？）

・・・偽善者！！！

ヒロはそうまでしていったい何を求め彷徨っているのだろう？
自分の心の傷を埋めたいがため？
・・・必死過ぎるヒロが哀れに思えると同時にこんな男にいとも簡単に堕ちた自分が情けなく惨めだ

裏で冷酷に女を捨てる男が、表で巧い言葉を並べ立てまた新しい女を探し狙う
評判のいいドクターとしてヒロの地区では一番人気の医院だと聞いた

・・・許せない・・・そんな想いと裏腹にヒロが哀れで悲しい

（ヒロ・・・上辺だけ取り繕ってウソで塗り固めて自分自身が悲しくないの？）

それほど女ってバカじゃないんだよ！！
あなたが思っているほどね？！

バーチャル世界からリアル世界へ引っ張りだしてまりこを捨てたヒロ
またバーチャル世界へ更に深く潜り込み獲物を探す姿は滑稽だ
プライドと劣等感を抱き・・・朽ち果てるまでヒロの旅は続くのだ

ろう

ウソで固めたそんな生き方もヒロが決めること

少しだけでも心の支えになりたい・・・まりこのそんな想いは永遠にヒロに届くことはない

泡沫

横浜の怪しいお店・海ホタル・旅行・スカイツリー・クリスマスイルミネーション

まだまだ約束いっぱいしてたよね、ヒロ？
こんなに早く終わりがくるなんて思っていなかったから

ヒロの『必ず時間作るから待ってて』の言葉を信じて、ただただ待ち続けた日々

『ね～ヒロ？　もし、終わりにしよう！って言ったらどうする？』
『もちろん、引き止めるさ！』
『それにもうこの先、誰かを好きになることはないよ、きっと』

『もし？もしだよ？別れることになったら・・最後はちゃんと会って話をして別れようね』
『うん』
そんな約束をしてたよね、何度も何度も！

『今どきこんないいオンナいないよね?！　頭のいいオトコなら絶対離さないわ』

『その辺探したってそうそう見つかるもんじゃない・・それを見抜けないオトコなんてたいしたことないよ　私がオトコだったら絶対離さないし』

『自己中のワガママオンナばっかり多いのに、まりこほど我慢強くて相手のこと思ってるオンナなんていないわ！』

『彼によくそう伝えておきな！　私ならそんなの耐えられない・・ってさ』

親友の洋子はいつもまりこにそう言い、よう耐えてるよね?と半分呆れ顔で笑う

『ヒロ、洋子がそう言ってたよ』

『・・・よくわかってるよ』

あははは・・・・ヒロ～?　全部ウソだったね

騙すならもう少し上手に騙して上手に別れてほしかったよ

散々、オンナと付き合って別れてきたんでしょ？
みんなこんな大人げない汚い別れ方してきたの？

あんな作品を読んだだけで？　あんなメールだけで？終わりにさせたヒロにとって
探していたシンデレラは・・・勿論まりこではなかったハズだし
まりこのシンデレラは・・・泡沫の夢だった

王子様と結ばれることを願ったのじゃない
お互い心の奥の深い場所に持つ傷が少しだけ癒えて・・・完治はしない傷に瘡蓋が出来ることを願っただけ
それまでの時間が欲しかった
全てが甘かったのよね　ありえなかったのよね

結果、まりこの心の傷口は・・・前よりも更に大きく広がり鮮血が吹き出した

（ヒロの傷口からは血が吹き出ているのかしら？）

ぼんやりとまりこはそんなことを思う

純粋にヒロに生きていてほしい・・・それだけを願ったまりこ
それなのに
（もうヒロなんか死んじゃえ）

悲しさ寂しさを怨みにすり替えることで、まりこは壊れてしまいそうな心の均衡をかろうじて保った

これこそ『ブラックシンデレラじゃないの？』
・・・泣き笑いの自嘲

とんだ茶番だったわね？

シンデレラなんて最初から存在しなかったのよ？！

泡沫だったのよ。。。まりこ！！！

さよなら

初めて飛び込んだＳＮＳサイト
そこで学んだこと？
バーチャルからリアルへの怖さ
バーチャルならではの勝手に作られてしまうイメージ
勿論、いい人はたくさんいることも知った

ヒロとの出会いはまりこにとって幸せなひと時を与えてくれたのかもしれない
たとえ嘘で塗り固めた出会いだとしても
数回しか会えなかったけれど、待ち続け祈り続けることしか出来なかったけれど

反面、嫉妬・人間不信・裏切り・報復・未練・怨み・悔しさ・憎さ・・そんな今までほとんどまりこの中には存在しなかった感情をハッキリと浮き上がらせた

そのサイトに留まる限り、ヒロの影がいまだにちらつく
（バーチャルサイトをやめてリアルな世界へ戻ろうか！）
・・・まりこは悩み続けていた

どうしたらどうしたらいいんだろう？
どんどん落ち込んでいく自分を立て直そうと足掻いていた

助けて・・助けて・・助けて・・

きっと時間しか解決の道はないのだろう
一日も早く時間が過ぎ行くことを思う

生きていかなければいけないんだもの
私の人生なんだもの

ブラック　シンデレラ？

ははは・・・シンデレラ自体、存在しなかったのに！
全て寂しさが生み出した幻影だったのよ

・・・さよな

ら、ヒロ

（完）

さよなら（後書き）

・・・寂しさ

人間だけが持つ感情なのかもしれませんね
それゆえいろいろなドラマが生まれてくるのかも？

こんな拙い・・・とても小説などとは言えない文章を思いがけず、
たくさんの皆様に読んで頂けて感謝の気持ちでいっぱいです

本当にありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6861v/

ブラック　シンデレラ

2011年10月10日11時30分発行